

神話の道(氷上姉子神社)コース

大高散策路 約3.0km
JR大高駅＝(市バス)＝砂畑下車 ―100m― 寝覚の里(日本武尊) ― 500m ―玉根社―10m―熱田神宮大高斎田― 200m ― 元宮 ― 200m ― 氷上姉子神社(宮簀媛命) ― 200m ― 屏所(久米墓地) ― 200m ― 石神遺跡 ―100m― 石神白竜大王社 ― 200m ― 春江院 ― 300m ― 大高城址 ― 800m ― JR大高駅

❶ 寝覚の里（緑区大高町中ノ島）
明治四三年熱田神宮の角田忠行宮司が日本武尊と宮簀媛の故事に纏わる碑を建てた。この地は昔は海で潮が打ち寄せて朝な朝なに海潮の波音に寝覚められたというロマンスから、碑文には「大高の里なるこの寝覚めの地名は千八百年の昔、倭武天皇(日本武尊)の火上の行在所に居られし時、朝な朝なに海潮の波音に、寝覚し給ひし方なる故にかくいい効はせるものならん云々。」と書かれている。

❷ 斎山稲荷社（いつきやまいなりしゃ）（緑区大高町斎山）
氷上神社南西四百米斎山山中の高台にあり名古屋の南部の展望がすばらしい。

東海市の大廻池北端からの登り道を行けば社頭に達する。もともとこの付近は古墳群のあるところで社も斎山古墳となっている。寛永十八年(1641)宮司山口泰三氏の先祖長兵衛重応が倉稲魂命を奉斎したのが始まりで元禄の頃(1688～1704)社殿の造営が行われ、以後民衆の崇敬も厚く多数の信者があったが、今次戦争後一時廃れたけれども現宮司の努力により賑わいが戻りつつある。

❸ 込高新田（こみだかしんでん）（緑区大高町一番割～二番割付近）
この地名は宝永(1704～1711)の頃に込高新田と名が付いたと言われる。江戸時代末期には込高新田という村があり、明治十一年(1878)に大高村に合併された。正保2年(1645)の税制改革「四つ概よつぐさし」の際に縮高となった給人(大高では志水甲斐守)に対して、知行不足分として新たに新田(給知)を与えたことを込高という。江戸初期より天白川下流地域が藩の許可を受け干拓された新田の中で、志水家が延宝八年(1680)より干拓を始め、天和二年(1682)に完成し、一旦は上がり新田(蔵入地)となったが宝暦二年(1752)に志水甲斐守に与えられたと尾張洵行記に記されている。さらにまわりの新田を知行地とするために、文化十二年(1815)従来給知となっていた他郡の給知を蔵入地として差し出して交換して貰い新たに込高新田とした。近年干拓の締め切り堤防の発掘調査が行われた。隣の寅新田の一角に込高津島社、秋葉社、弘法堂、青峰山観音が祀られている。

❹ 氷上姉子神社（ひかみあねごじんじゃ）
延喜式内社（緑区大高町火上山）TEL052-621-5935
熱田神宮の摂社で祭神は尾張国を開拓した天 火 明 命の末裔国造乎止与命の女で宮簀媛命。熱田神宮との関わりは日本武尊から預け授かった草薙劔を一族の斎場だった熱田の地に奉安されたことに始まる。

社殿は宮簀媛命の館趾(現在の末社元宮)に創設、持統天皇四年(690)に現在地に遷座され氷上山の一帯に広大な五.九ha(17659坪)の境内があり、貞享三年(1686)五代將軍綱吉が社殿を造営、現在の社殿は明治二六年(1893)熱田の別宮八剣宮の本殿移築、拝殿は名古屋離宮の仮賢所を昭和八年(1933)に移築したものであったが、昭和六一年(1986)拝殿ほか改築され、古より大高町の氏神として敬われている。境内には元宮、神明社、玉根社の末社がある。玉根社は一説には古墳の跡と言われ、少彦命名が祭神で

医薬、酒造りの神様でこの地では信仰が厚い。曾ては眺望のよい景勝地で巨木老樹の繁茂せる社叢があったが国道23号線で一部開発され昔の面影はない。

例祭は十月八日(現在第一日曜日)で各町内より傘鉦車、狸々が奉納され、五月六日の頭人祭では昔の鷹狩りで奉納されていた鷹の代わりに鷹の絵馬を奉納する行事がある。また六月第四日曜日に行われる大高斎田御田植祭が近年有名である。

❺ 氷上姉子神社の御田植祭と拔穂祭（ぬいぼさい）

氷上姉子神社境内の 熱田神宮 大高斎田で毎年六月第四日曜日に御田植祭が古式豊かに執り行われています。この地では昭和八年から休みなく続けられており、明治以降戦後まで熱田神宮斎田であった瑞穂区神穂町の御神田が都市化によって田植えが出来なくなり、今ではここの御田植祭がとって代わり、揃いの衣装で田植歌に合わせて田舞を奉納し田植えをしている。また拔穂祭は九月二八日に取り入れる祭りが行われ、収穫米は熱田神宮の本宮始め各社の年間の祭典用神饌として供えられます。

❻ 久米家墓地（緑区大高台三丁目）
氷上姉子神社の神職であった久米家の墓碑がある。また久米家文書はこの地方の貴重な文化遺産である。

❼ 平野遺跡（緑区大高台三丁目）
昭和三九年以降の調査(表面採集)で氷上姉子神社の東、標高二十～三十米の丘陵上畑地の十数箇所地点で大きさ三～七厘の先土器時代の小型石器が壱千個余採集され鼓打器末期(一万年前～三万年前)のものと推定された。

❽ 石神遺跡（緑区大高台三丁目）
六世紀後半の古墳石室の跡地に室町時代に石神さまとして祭祀遺跡が発掘調査で解った。発掘調査以前に石室の石は石神白竜大王社に移設され立石、止石に使用されていた。

❾ 石神白竜大王社（緑区大高町石神）
春江院の裏手の坂道を登ると丘陵地の中腹に大楠と桜の大本木があり石神白竜大王社の石碑が見える。祭神は石神白竜大王で祠と塚の石が祀ってある。昔ここに塚がありヘビが住んでいて、塚の土や樹木を構うと「たたり」が有り、村民が白竜さんを祀り鎮めたといういい伝えがある。また「埋もれたる神の碑出て時雨かな」の句碑があり、石神遺跡の石室の一部と思われる石が置かれている。

❿ 朝苧社（あさおしゃ）（緑区大高町東姥神）
氷上姉子神社の境外末社で祭神は火上老婆霊で氷上の里の地主の神で宮簀媛の母神と伝えられ、俗に老姥神様といわれ乳の出ない婦人が祈って効験があり、近在で「乳の神」として尊崇している。また朝苧社は麻苧社とも思われ織物の神社ではないかといわれている。

⓫ 大高山春江院（しゅんこういん）**曹洞宗**（緑区大高町西向山5）TEL052-621-2041国の登録文化財指定
弘治二年(1556)の創建。大高城主水野大膳が父の和泉守忠氏菩提のため、尾張横須賀長源寺四世峰庵玄祝を開山とし、和泉守を開基としたのにはじまる。父の法名「春江全芳禪定門」により春江院と号す。本尊は多宝如来。石畳みの参道を上がって「大高山」の山門をくぐると大きな「不許葷酒入山門」の石碑が目に入る。正面に本堂、右手には大きな庫裡、鐘楼があり、書院、不老閣、茶室、観音堂、弁財天堂等が広大な林叢の境内にある。本堂は文政十三年(1830)再建、正面八間半、奥行八間、単層入母屋造、本瓦葺で鐘楼は慶応元年(1865)に再建された。書院は有松絞の開祖竹田庄九郎宅にあった江戸時代参勤交代の諸大名や公家の休息に当てられていたもので、明治十二年(1879)に当山に移築されたものであり襖絵は狩野永秀画「しらさぎ」が描かれている。大高町に末寺と

して明忠院、東昌寺、薬師寺、弥陀寺がある。

墓地には当地の文人餘延年(山口墨山 篆刻、俳人、1745～1819)、山口耕軒(墨山の子私塾時習館学頭、1767～1837)、下村丹山(画家、一六羅漢奉納、1804～67)、下村実栗(茶人久田流、1833～1916)らの墓がある。

⓬ 大高城跡（緑区大高町城山）**国の史跡指定**
大高城跡は寛文村々覚書によると標高二十米、東西百六米、南北三二米の台形の丘で四方に二重の濠があったが、現在は土居、内濠とも形態は殆ど認めがたい。古くは天白川の北方は年魚市潟といわれこの地からの景観は絶景であった。築城年代は不詳であるが永正年間(1504～1521)の頃に土岐氏の守護代出の花井備中守が、天文・弘治(1532～1557)の頃には知多郡東浦の水野忠氏・大膳父子が居城した。桶狭間の戦いの直前に鳴海城主山口左馬助に攻められて落城。今川方の鵜殿長助の支配下になり、織田信長が鷲津・丸根の砦を築いて對抗したが、松平元康(徳川家康)が弱冠十七歳で兵糧入れに成功したのは有名。合戦後元康は岡崎に帰り廃城になった。その後元和二年(1616)志水忠宗(1574～1626徳川義直公の母相応院の兄)が尾張藩の家老(1万石)として城跡に居宅を設け明治三年(1870)に廃した。昭和十三年国指定の史跡になった。本丸西端に鶴岡八幡宮を勧請した城山八幡宮があり、寛文十年(1670)に志水甲斐守が寄進した石灯籠がある。

⓭ 秋葉社（緑区大高町高見32）
祭神は火之迦具土神(迦具突地神)で創建は不詳だが、社寺明細帳には寛成十二年(1800)の勧請、しかし常夜灯の銘には明和七年(1770)になっている。昔から大高は火事が多く村民が恐れていて防火の神である秋葉社を最も賑やかなT字路のこの土地に祀ったのではないかといわれる。このあたりに江明市場が立ち宝永(1704～1710)の頃から馬市や諸商いが、春秋に二回三十日間ずつ行われ、享保十七年(1732)頃から六斎市(月に六度日を定めて市を開く)が許された。この付近を単に「辻」とよび大高の中心であった。また大高の祭事の際にはここに集合して出発、解散するところである。

⓮ 八幡社（町屋川八幡社）（緑区大高町町屋川14）TEL052-621-6012
JR大高駅西三百米の所にあり、祭神は応神天皇、神功皇后、玉依姫。社伝(原田家)によれば火高見城(大高城)主花井備中守が当所と大高城内に鶴岡八幡宮(治承4年1180源頼朝が宇佐神宮を勧請)を勧請し、広大な神域を持っていたが大高小学校(現北小学校)の敷地にあてられたりした。元は村社で氷上姉子神社について建物の規模は大きく社殿、拝殿、末社、石鳥居などがある。家康も永禄四年(1561)若武者のとき参詣祈願した記録がある。昭和五六年(1981)に本殿を、平成十一年社務所の改築、平成十三年(2001)には拝殿、祝詞殿の改築、水手舎の新築、玉垣の新設工事が行われ十四年九月に竣工奉祝祭が執り行われた。

江戸時代は武士は城山八幡社(城内)に参り、庶民は町屋川八幡社を参ったと言われる。境内の隅に大高小学校の奉安殿が修復されて残っている。
⓯ 大高駅（緑区大高町鶴田）TEL050-3772-3910
レフォンター
明治十九年(1886)三月一日県内で武豊、半田、亀崎、緒川、熱田とともに最初に設けられた鉄道駅、当時は単線で駅舎はなくホームが一本あるのみ。切符の販売は駅前の個人宅に委託されていた。その後二二年に東海道線が全通し、駅舎がいつ整備されたかは解らないが、明治四十年には複線になり利用者は徐々に増えつつあったが昭和十年(1935)大日本紡績(現ユニチカ)が誘致されると専用線が設置されるや駅舎の改築がなされた。昭和二八年には念願の電化が完成煤煙から解放され、三七年に新幹線工事につき橋上駅に。それまでは町屋の主力は西側にあるのに東口しかなかったが東西自由通路ができ便利になった。昭和五三年高架化された時に駅前が整備され現在の駅に作り直された。

大高の昔

☆大高の先史
猿投山麓から第三紀層の丘陵は南に伸びて鳴海丘陵を経て知多半島へと連なっている。この丘陵の北部に源を発した天白川が流れ、この川下の平野は古代から年魚市潟と呼ばれた地であり、丘陵とこの低地がおりなす造形の妙は天白川周辺に多くの谷を構成している。この谷が先史時代人の生活を営んだ地形的環境でありその多くの遺跡が発見されている。天白川左岸の鳴海丘陵には上ノ山、鉦の本、 雷、矢切の貝塚、右岸の瑞穂丘陵には瑞穂遺跡、笠寺丘陵には桜田貝塚、見晴台遺跡がある。しかし大高川の流れる谷丘陵地には現在のところ貝塚、遺跡らしいものは発見されていないが、近年の調査で平野遺跡の小石器、西大高畑から氷上の山頂にかけては弥生式遺物が、斎山古墳の付近では小規模ながら貝塚群が発見されている。

古墳時代については隣接の東海市名和から一連の丘陵続きに愛知県最古の兜山古墳(四世紀末東海市)がありその東の火上山の西麓に三基の小さい三ツ屋古墳群(六世紀後半東海市)と斎山古墳がある。この古墳は直径三十米高さ三米程の円墳だが前方後円墳であったと考えられ出土した埴輪から六世紀のものであり、現在ではこれより東の大高川左岸にも古墳があった可能性は高く尾張の豪族との関係が深いものと思われる。

☆大高の地名
大高の地が古くは氷上邑（火上也）と呼ばれていたことは氷上姉子神社の社名によって現在まで伝えられている。古事記、日本書紀によると日本武尊が東征する途中に尾張国造りの祖 建 稲 種 命の妹宮簀媛の家に立寄り媛を娶り東征の任を果した。熱田大神宮縁起（寛平二年890）によると草薙劔をこのとき尊から授かり、媛に熱田に祀られ熱田神宮の起源となった。そして媛の住居のあった所が後の愛知郡氷上邑であり、媛没後氷上邑の神として祀られ氷上姉子神社となったのである。また同縁起のなかの日本武尊の歌に「奈留美良乎 美也礼波止保志 比多加知爾 己乃由不志保爾 和多良部年加毛」とありこの「比多加知」は、本居宣長の古事記伝には「比多加知は火高地なり」とあり、「氷上とも火高とも言いしなるべし」と、またいかなる理由でも氷上邑、火高が大高になったのか。氷上姉子神社の祠官久米家の文書によれば永徳二年（1382）火災があつて社殿や民家の多くに被害があり、「火高」の火の字を改めて大高としたと言うのである。**☆中世の大高**
大化改新のころは国司・郡司が置かれ当時は成海郷に属し、現在の鳴海、有松、豊明、大高、名和辺りまで含まれていて愛知郡に属していたが、いつの頃から子細は分らないが戦国時代に再編され知多郡になった。室町時代になり尾張の守護、土岐氏の臣が鷲津山に居を構え、その守護代を鷲津殿と呼んでいたり、永正6年（1509）の文書には大高城主花井備中守の名がみえ城が築かれていたものと思われる。その後知多郡緒川の豪族水野氏の居城大高城になるのだが、前掲の久米家文書によると天文十二年（1543）には大高城主水野大膳亮の名がみえ、既に十六世紀前半には大高を領有していたと思われる。

戦国時代織田領と今川領の接点であつたこの地方は桶狭間の戦の前哨戦として小豆坂（岡崎市）の戦いが天文十一年（1542）と天文十七年（1548）に始まり織田信秀と今川（松平広忠）と最初の戦いで織田方が、二度目は今川方の勝利とされるがいずれも決定的ではなかった。その後各地で小競り合いの戦いがあり、永禄元年（1558）有名な松平元康の大高城兵糧入れの成功で、同三年（1560）になり義元の織田討伐が始まる桶狭間の戦いとなった。まず大高城、丸根、鷲津の攻めで織田方が敗れ、また桶狭間近くの前軍の戦でも大敗を喫っていて織田方が不利であつた。しかし今川方に油断があつて雷雨に乗じて奇襲をうけ織田方の勝利に終わった。これで信長は天下統一の大覇業に向かって進むこととなり戦国乱世を暗示するものだった。

☆江戸時代の大高
徳川の時代になって大高は藩主義直公の母（相応院）方の生家である志水甲斐守忠宗の領地となり、元和二年(1616)大高城跡に屋敷を構え、明治二年版籍奉還となるまで支配していた。また志水甲斐守の給知以外は鳴海陣屋（代官）の支配下であつた。慶長十三年(1608)の伊奈備前守によって行われた備前檢地帳によれば、田百一町六反余、畑五五町一反余合計一五六町七反歩で石高一七一二石余(元高)、耕地所有者三二五人であつた。それで慶長十九年(1614)頃から新田開発が行われ、天白川左岸の河口付近の干拓を進め、特に込高新田は海部郡の福田、知多郡の加木屋から入植させ、御小納戸資金で延宝八年(1680)に約二十町歩弱が開発された。その時用水池として蛇池が造成されたと言われている。その後宝暦二年(1752)志水甲斐守領となり三五戸一八三人との記録が残されている。もともと大高は志水甲斐守の給知であるので蔵入れり税が高かったので住民は窮乏していた。文化十二年(1815)には二三四町四反四畝農家六一四戸であり、一戸当たりは三反八畝と減っていてしかも大部分が小作農であつた。江戸末期になって文久山地帯六五町歩の山林開墾が始まったが成功には明治になってからである。大高では元禄ころに酒の株制が敷かれ、当時の酒株帳によれば大高村で二百石で遠く江戸まで出荷した。また享保十七年(1732)六斎市を開くことが藩より許可された。

参考資料

緑区誌、名古屋区誌ｼｰｽﾞ 緑区、緑区の史蹟、大高町誌、ほだかのあゆみ、緑区の史跡と文化財、名古屋の史跡と文化財、愛知県の歴史散歩、愛知百科事典、角川愛知県日本姓氏歴史人物辞典、熱田神宮とその周辺。